

幼児音楽におけるコーディネーショントレーニング — 言葉と身体の整合性 —

中 西 智 子

Coordination Training in Children's Music

Satoko NAKANISHI

はじめに

乳幼児がなぐり描きのように、無意識的に即興的に口づさむ“声・歌”、そして思わず手を打ったり身の回りの音の出る物から音を出してしまう“音・音楽”の音楽的な表現行動について、どこがどのように素晴らしいのかを説明するのはとても難しい。しかし、乳幼児のこのような音楽的な表現は、全てが完全に聞く人の琴線にふれてしまうという不思議な力をもっている。音程やリズムの不安定なことは一切気にならずに彼らの心の安らぎ、欲求や感情、意思などの自己表出を感じ取ることができよう。そして、彼らの表現活動は成長に応じて心と身体が整合されることにより多様な表現方法が可能になっていく。

『歌う』ことに関しては、1984年に一歳から六歳の乳幼児1424名の保育者へアンケートを依頼した音楽的な能力適性の調査によると、「みんなと一緒に楽しんで歌を歌えますか」の質問で、二歳の女兒と三歳の男児にはできない子は見られなかった（註1）。女兒は男児より楽しんで歌うことが得意ようである。三歳前半位までは、子ども同士の相互の関わりが殆ど無いいわゆる「平行遊び」の時期であり、次第に〈友だち〉を意識し始めて友だちとの遊びが楽しくなる頃でもある。友だちと一緒に楽しんで歌える状態から、人間関係の中で音楽の魅力を意識するようになり、「みんなで声を出す（唱和）と気持ちいい」「音が合うと気持ちいい」と集団で音楽を共有する姿勢が見られる発達段階へと繋がる。

1984年の調査では「いろいろな曲の速度に合わせて歩いたり、走ったり、飛んだりできますか」の質問においては、男女共に四歳児になれば全員ができており、曲の速度を認識し速度に対応して身体を動かすことができるまでに成長している。「リズムに合わせて手を打つことができますか」の質問に対しては、三歳男児で92.9%・女兒で89.7%ができるようになり、三歳児では音楽に合わせて意図的に手や腕を動かせるように運動能力が発育していると考えられる（註1）。上記の調査では声を出さずに手を打っているのか、歌いながら手を打っているのか、についての詳細に調査はされていない。

1981年に五歳児52人を対象にしたサイレント・シンキングの調査がある（註2）。この調査では、7割の幼児にサイレント・シンキングが可能であり、残り3割の幼児もおおかたできていた。このことから、五歳児では心の中で音楽の流れを感じる内的聴感覚の能力はほぼできあがっている、と考えることができる。なお、サイレント・シンキングの調査では身振りをいれた身体表現と歌唱能力の関係を調査しており、身体表現が歌の記憶術的な効果に大きく役立つ

ていることが判った。幼児期には歌の内的聴感覚育成を考える場合、言葉と身体運動の相互関係で指導方法を計画すると歌唱学習の効果が大きいことが判った。即ち、5歳児は声を出さないで音楽に合わせる身振り（筋肉運動）の整合性が可能であり、彼らにはこのような指導を展開可能な能力が発達していると考えられる。

幼児教育現場における音楽活動のねらいの1つには、仲間と合わせる声や音・音楽を楽しくて気持ち良く演奏する力を育み、演奏する音楽感覚と身体感覚の基盤を習得することが挙げられ、保育カリキュラムに組み込まれる。それは、声を出したり音を出す身体の筋肉運動の整合性であり、仲間と一緒に楽しむ対等関係（友だち関係）が動力因になっているとの考え方が基盤にある。

本稿では、幼児が音楽をする時の、音楽と筋肉運動の整合性、仲間との対等関係に視点をおいたコーディネーショントレーニングについて考察する。

I 言葉のリズムと身体のリズム

1 シンボリックランゲージとリズム打ち

リズムを言葉（シンボリックランゲージ）に置き換えて、幼児のリズム認識に内的聴感覚によるサイレントシンキングがどのように関係しているのかを、シンボリックランゲージから調査した先行研究がある（註3）。五歳児60人を被験者としてシンボリックランゲージとリズム打ちのタイミングの同調度を1000分の1秒の分析によって比較して、幼児が打つリズムのずれについて検討した資料によると、シンボリックランゲージの提示は実験者が一緒に演奏をして示す場合と言葉での説明だけの場合において、幼児の集中力の状態が数値の差異に表れた。例えば、以下の如くである。

- ① シンボリックランゲージの有無に関わらず、幼児が音を出す事へ興味を持つ場合には集中力が発揮できる。
- ② リズム表示においては、実験者が提示しない場合より実験者から提示がある場合の方が、実験者の身体の動きが視覚的な情報源として効果がある。
- ③ リズムに含まれる休符については、シンボリックランゲージがある場合の方が休符の後に始まる音のエラーが少なく、リズム演奏が安定する。
- ④ シンボリックランゲージが有る場合には、間違えた時にフィードバックが容易である。
- ⑤ シンボリックランゲージで打つ場合にはサイレントシンキングで音楽の流れを掴み直していると考えられる。
- ⑥ 被験者同士が同調レベルをどの程度に認識しているのかは判らないが、シンボリックランゲージが有る場合、幼児は顔を見合わせながら打っており、共同の活動として調和関係を意識していると思われる。
- ⑦ 男児にはリズム打ちによって少しずつ浮かれて遊びになるような場面が見られたが、女児の場合には見られなかった。このように、男児が生き活きとした躍動感を感じさせるリズム打ちをする傾向では、1000分の1秒のチェックにはデータではズレとして表示され、女児よりは同調度が低くなった。

以上の結果から、幼児の言葉の獲得とリズム打ちの関係は、シンボリックランゲージの役割が仲間とリズム打ちをするコミュニケーション手段として他者との関係を構築できると考えら

れる。

本来、言葉の獲得は欲求や感情、意思の表現となって他者との関わりの中で成立している。言葉が自分の欲求や感情の表現力となり、コミュニケーションに重要な役割を持つように、言葉（シンボリックランゲージ）のリズム奏で「みんなの音が揃った」満足感には、言葉のリズムの果たす役割は大きい。

2 息の自己コントロール

3歳の誕生日に蝋燭を立てたケーキを用意して一気に吹き消す西洋の習慣は、言葉を発するための会話の力（息を吸う、溜める、一気に吐き出す）ができるまでに成長しているかどうかを見るものである、といわれている。話し言葉の学習が身体の成長と関係していることを気付いて、家族が揃う誕生日に成長の喜びを分かち合う、ということのようである。

確かに、乳幼児は感情を表現する言葉や非言語的な言葉には全身的な表出が伴い、自分の意思に沿って歌う場合は個人差もあるが、3歳頃までにできるようになる。幼児の感情表現の言葉は“はやし歌”のようにもなって、リズムカルな会話は『歌』のように聞く者へ伝わる。言葉に表情があると、そこには自ずとリズムに〈間〉が在り、幼児の息遣いが自在になっているように伝わってくる。

感情を伝える意味が対象者へ正しく認識され、言葉がコミュニケーションの手段となるには、言葉をなぞるように発するのではなく、言葉を対象者へ表情を付けて積極的に身振りをする 것도必要である。そのためには息の自己コントロールが作用することから始まるであろう。

また、一人でつぶやく場合とは違って、話す幼児側は聞く側が存在することで伝えたい気持ちを自己表現として伝える工夫に及ぶのであり、表現の想いの勢いは、音楽的な表現と似て伝わる。

3 言葉のリズムと身体感覚：わらべ歌

幼児や児童、学生からわらべ歌を採集する場面では、彼らは歌詞だけを言うのではなく、常に手や身体を動かしながら“旋律を伴う『ことば』”として歌詞（言葉）を伝えようとする。このように歌詞を手や身体の動きと分離できない日常的な現象は、歌詞の意味合いと身体の動きに関連性を持って記憶しているからであろう。わらべ歌は、言葉のリズムと身体のリズムが一体化して遊ぶ代表的な音楽活動である。

歌詞を呼び起こすには身体も呼び戻すことになるわらべ歌では、五歳児30人が一斉に手遊び歌を歌った場合でさえ、人が聴き取る拍のズレは少ない。このように、言葉のリズムと身体のリズムの感覚が互いに関連するのは、遊びに必要な言葉のリズムと音程の確認とそれに併う遊びの身体運動のリズムが一体となって身体に記憶をしている故である。その前提は《友だちと遊びたい》気持ちから出発していると考えられる。わらべ歌の言葉のリズムと身体感覚については、以下の特徴をあげることができる。

- ① わらべ歌は音楽と言葉の関係が密接で、身体の動きを伴う遊び歌である。
- ② 乳幼児の個々の発達に適したわらべ歌を自在に選ぶことができる。
- ③ 遊ぶ子どもたちが自分達に適するように、歌詞を変えたり、遊び方を変えるなど、わらべ歌は自由自在に変容ができる。
- ④ のびのびとおそれのない緊張感が伴う。

このような特徴を知る乳幼児教育の現場では、わらべ歌で遊ぶことは言葉の記憶と音の記憶が身体の記憶を促進して遊びが一層深まり、遊びの表情が豊かになることを経験的に熟知している。故に、日々の保育へ歌詞と動作が一体となったわらべ歌を含む〈遊び歌〉の教材が多く用いられることになるのであろう。

幼児が仲間と遊ぶ音楽表現には、言葉と身体の発達の整合において仲間の対等関係が重要な要因と考えられる。特に、異年齢の場合ではそれぞれの発達段階に見合う活動により、調和の良い表現力育成に結びつくことが可能となる。

Ⅱ コーディネーショントレーニングからの音楽表現活動

人は生きてきた経験的な活動と、これからの活動によって日々の生活は続く。幼児にはこれから始まる未だ体験していない活動への意思を、積極的に想像することには慣れていない。しかし、幼児に意思をもって活動するこれからの活動イメージが想像できたなら、一人ひとりの想像は大人の考える経験的な概念とは異なり、自由な広がりをもつことができるのではないだろうか。

2002年度から義務教育に我が国の伝統音楽が音楽指導に取り入れられるようになり、琴、三味線、和太鼓の学習指導が進められている。その中でも太鼓は「打てば響く」楽器として、既に小学校入学以前の保育所・幼稚園において運動会・生活発表会などに取り入れられた活動が見られる。一般的に、指導者が見たり聞いたり、体験した等の経験的なことに基づいて実践する事例としては、全員がお揃いの法被を着て1つの太鼓を3人位が囲んで打つ姿の集合体となる。このような場合、子ども達の演奏する姿はとてもかわいらしく、少々リズムが合ってなくても、幼児・児童が楽しそうに打つ存在そのものに顔が緩む。

太鼓演奏の選曲では、その多くは、子ども達が歌い慣れた音楽をCD・テープで流す『うた』に合わせて太鼓を打っている。時には、地域の太鼓チームの曲を短く簡単にアレンジしたリズムを打っている。しかし、幼児が仲間と音が揃い「気持ちいい」と共感できる瞬間の心地良さは、彼らなりに仲間たちとの音を出す何らかの〈段取り〉が会得できてからのことであろうと考える。それには、内的な聴感覚であるサイレントシンギングによる「言葉のリズム」が有効に果たすのではないだろうか。

幼児が打つリズム理解にはどのような〈段取り〉で指導することが考えられるのか、Y幼稚園での実践例を基に、言葉のリズムと身体のリズムの関係を紹介する。

1 幼稚園での活動のねらい

Y幼稚園では、園長が10年前から保育へ和太鼓を導入する計画を持っていた。その理由として、

- ① 三重県伊勢市には伝統的な芸能が沢山あり、それらの芸能には太鼓が用いられている。園児が太鼓を身近な伝統芸能の鳴り物の一つとして慣れ親しむ機会を提供したい。
- ② 伝統芸能に用いられている「伝統音楽」にはこだわることなく、幼児が太鼓の音の響きや太鼓を打つことを楽しんでもらいたい。
- ③ 太鼓を通して大勢で音楽を演奏する醍醐味を体感させたい。
の想いがあった。

2002年度から始まる完全週休2日制に合わせて、第3土曜日に独自の体験学習“あそび教室”を計画した。親子で自由に参加できる“あそび教室”のプログラムを数種類用意し、その中に和太鼓教室を組み込んで実施した。筆者は和太鼓教室のコーディネーターとして、同時に指導者として参加した。

さまざまな“あそび教室”はそれぞれ午前中2時間に3回繰り返して開かれており、3種類の教室を廻ることができる。希望して“和太鼓教室”へ参加する幼児は、共通して和太鼓を体験してみたい、楽しみたい、という気持ちである。第3土曜日に太鼓を練習する和太鼓チームが3つ誕生した。月1回の練習で少しずつながら、加算的に幼児が習得したリズムの構成で音楽的にまとまってくる幼児自身の演奏の手ごたえは、当初の参加人数が維持できた要因と思われる。

次々と習得できる音楽の面白さと、無理なく全身を使う筋肉運動の疲労感の心地良さが渾然となっていたからであろうと考える。園の保育者が指導者の補助として幼児に接することで、日常の保育カリキュラムとは性質が異なりながらも、保育者が一緒であることで幼児の気持ちは安定していた。さらに、時には兄弟・姉妹も一緒に参加する教室であり、一歳半の男児が太鼓を打つなどの賑わいがあり、真に遊び心が充実する条件が揃った。なお、筆者の助手として、太鼓歴10年の里佳先生に加わっていただいた。

2 指導のねらいとカリキュラムの柱

幼児が太鼓の練習を通して『音楽』する充実感を楽しみとすることができる指導案を目指し、次の3点を重視して実施する。

- ① 音楽のフレーズ感覚を把握できるようになること。
- ② 音符と休符の感覚をシンボリックランゲージから把握できるようになること。
- ③ 太鼓演奏には『見る・聞く・声を出す・動く』の要素が必要であることの確認。

通常の保育にも‘階段早登り’‘腕と足のジャンケン’や‘ケンパ’のように、いろいろな全身を使う遊びの場面を積極的に用意する。以下は、Y幼稚園で実践した“あそび教室”での指導記録を中心にまとめた。

第1回（5月）

初めての太鼓体験では、太鼓のリズムを打つということではなく、幼児にはムチャクチャに打っている様に感じてよいから、音楽のまとまり感覚〈フレーズ〉を会得できるように指導する。

課題曲は手遊びの「ひげじいさん」（作詞者不詳／玉山英光作曲）とする。この曲は、幼児が全身で手遊びをしながら歌い、歌詞によって曲のフレーズを理解するには適している。年齢を越えて全員が楽しめる曲である。

本時は初回であるので、幼児が歌に合わせて太鼓を打つのではなく、歌の最後に《おわった》という感覚の実感を会得することから始める。そのために、掛け声を出して全員で納得できるようにする。太鼓でしばしば用いられる連打の手法を利用する。太鼓は次の3点が稽古の出発といえよう。①音を聴く ②打つ姿を観る ③打つ人と聴く人が一体感を味わう この3つの要点を初回に納得できることを目指した。そして、次回の体験が楽しみになるように、太鼓類は幼児の身近な場所へ置いておく。

3グループが順番に太鼓コーナーへ出入りするので、進行に関してはカリキュラムに合わすのではなく、幼児の実態に合わせてながら手際よく進めた。

第2回（6月）

幼児が2回目の経験の中で体感する目標として、次の2点を挙げた。

- ①太鼓の音色の聴き取りとして、高い音の締太鼓と低い音の中太鼓の理解。
- ②四分音符と八分音符の差異ができるように、音の余韻と音の勢いへ注意が向くこと。
- ③音楽構成として3部形式に慣れるために、「みんなおともだち」（石丸由理 作詞／作曲）を和太鼓教室のテーマソングとして紹介する。筆者が歌い、里佳先生による太鼓伴奏である。

本時は「みんなおともだち」の紹介から始め、前回の課題曲「ひげじいさん」のおさらいから太鼓の稽古を始めた。曲の最後の連打については、前回のクレッシェンドを今回は小さい音からできるだけ大きな音へクレッシェンドをして変化の練習をした。さらに、連打の後に「そーれっ ドンドンドン」を描って全員で声を合わせることによって音楽の終止感を呈示した。

課題曲は言葉とリズムが合っているので、太鼓体験2回目の本時では、里佳先生が「トントントントン」の歌詞のフレーズを低い音の太鼓（中太鼓）で演奏し、「ひげじいさん」から始まる歌詞のフレーズを筆者が高い音の太鼓（締太鼓）で模範演奏した。

幼児は歌の部分を2種類の太鼓に別れて交互に演奏する形となった。そして、最後には全員で連打のクレッシェンドと「そーれっ ドンドンドン」を入れて曲の全体像が完成した。ここで始めて「ひげじいさん」全曲を演奏したことになる。

第3回（7月）

3回目の指導目標は次の2点である。

- ①同じリズム校正でありながら替え歌を楽しむ経験をする。
- ②太鼓演奏時の姿勢を安定するために、「足ジャンケン」で遊ぶ。

テーマソング「みんなおともだち」から始まる。指導者から聞き覚えた個所を指導者たちと一緒に歌ったり太鼓の音を出すように促す。そして、「ひげじいさん」の替え歌である「アンパンマン」の歌詞をペーパーサートで確認し、幼稚園の保育で楽しんでいる「アンパンマン」の手遊びでもリズムを打てることを経験する。

「足ジャンケンができるかな？」と問い掛けて、足ジャンケンをすることで、太鼓を打つときの足の位置と身体の向きを覚える。「＜おへそは太鼓へ向けてね＞を守りましょう」ということで、「ひげじいさん」と「アンパンマン」の演奏で身体の形を確認する。

第4回（8月）

本時は筆者が参加する最後の指導であり、以後は幼稚園の先生と里佳先生が続けることになっている。3回の稽古のおさらいとして、以下の4点を幼児たちと確認した。

- ①言葉とリズムの一致の確認。
- ②音楽のフレーズ感覚と掛け声のタイミングを身体で会得できる土台作りの確認。
- ③太鼓を打つ姿勢の確認。

本時は、稽古を見ている親や子ども達と一緒に音楽に参加できるように、菜箸で床を打ち、伴奏としての音を出して傍観者ではなく、参加意識を促した。太鼓の音に床を打つ音が加わり、音楽が重層的になる。菜箸グループには太鼓を打つ側への注意と一緒に聞き取ろうとする姿勢が見られ、場を同じとする者同士に一体感が生まれた。

3 コーディネーショントレーニングの段取りの必要性

太鼓指導に身体運動と音楽の整合性と仲間たちとの共同性の要素を考慮に入れた指導の計画性は必要である。

幼児の太鼓演奏を聴くと「随分と練習をさせられたのではないかしら」と感じる場合がある。「練習をさせられた」のか、主体的に「練習をした」のか、どちらであるかは聴く人へは直感的な印象として伝わるように思われる。その重要な要因としては、幼児が音を出す自信と音を出す勇氣があるか、楽しんでいるか、ということである。自信と勇氣があれば「させられた」印象を与えることはないであろう。

太鼓に限らず、打楽器指導のリズム感覚を習得する〈段取り〉は、幼児自身が自分の感覚として習得している【うた】の歌詞と遊び方のリズム（音・音楽）の確認が一体となり、身体を通して記憶することからの出発であると提案したい。例えば、五歳児が一斉に30人で手遊び歌を歌った場合でさえ、人が聴き取るレベルでの拍のズレは少ない。このように、言葉とリズムと身体感覚が互いに関連している場合には、打楽器指導のリズム感覚を習得する〈段取り〉として役立つ。そして、歌詞を入れない音楽のリズム指導には、フレーズ感覚が重要である。

太鼓演奏のフレーズ感覚で特徴的な事例としては、東京の助六太鼓系、愛知県の新次郎太鼓系のように、手に持つバチをクルクルと放下芸のように回しながら演奏する打法がある。大人の音楽の流れとして、見せるフレーズ感は理想的であろう。しかし、幼児期には特別の目的で無い限り、音楽の流れにはまった華やかなバチさばきの、バチが手から離れて手に戻る瞬間と流れているリズムの間とのコントロールの見せ場等は必要ない。

幼児期にはわらべ歌のように、幼児が息の自己コントロールをグループの仲間たちと合わせながら遊び方の『間』のタイミングを覚えるように、心身の発達に見合った教材が適している。

Ⅲ コーディネーショントレーニングの自己調整機能

Y幼稚園の幼児は初めての太鼓の練習で「おもしろいよ」「音がでたよ」と喜んでおり、足を開いてポーズを決めるなど、リトミック教室のような指導を楽しんだ。時には保護者や兄弟・姉妹も一緒に太鼓を打つ魅力を、その場にいる全員が共有できた。そして、園長が言う「太鼓は失敗感を残さない」練習が続いた。

筆者は合計4回の指導に限り、その後は幼稚園の保育者と里佳先生が続けている。

大人が抱く太鼓音楽のイメージとは大きく違う筆者の太鼓指導で始めるY幼稚園では、筆者が進める以下の内容についての説明時点で賛同を得ていた。

- ・言葉と音で演奏する音楽の全体像を伝える。
- ・言葉で幼児に音楽のフレーズを伝える。
- ・身体を動かすことが一緒に演奏する仲間との音楽の共有に役立つ。
- ・異年齢の幼児間で音楽の共感や達成感を伝えることができる。

幼児は入園当初から、園舎では上靴ではなくゴム底の井草の草履を履いており、階段や廊下を元気に走っている様子が判っていたこともあり、月1回の太鼓指導と日常的に自由に太鼓を打てる場を用意することで、音楽的なまとまり感を演奏実現できると約束した。

4回の指導が終了後、園長から幼児が太鼓を経験することについては、次のような意見があった。

- ① 太鼓の音が響く部屋に連れられてきた乳児が寝ているというのは、心地良い響きに囲まれている感覚があったと思う。
- ② 日常的に、幼児が手で机をリズム打ちする姿や棒で床を打つ姿がしばしば見られる。
- ③ 練習日について再三確認をしに来る子がいる。
- ④ 園長先生も一緒に太鼓しよう、と誘われる。

そして、幼児の身のこなしについて、以下のような意見があった。

- ① 階段を上るときや障害物を避ける時などにバランス感覚がよくなった。
- ② 歌っている時のリズム感や音楽に合わせて動く時の身体の動きが自然体になった。
- ③ 手遊びなど、指導者の模倣がすぐにできるようになった。
- ④ 異年齢の子ども達が相互間に太鼓演奏を楽しむ共感が生まれた。

このような成果は、太鼓演奏の身体のそなえとしてのみならず、無意識の行為として自然に自己をコントロールできる判断の芽生えが生じていると考えてもよいのではないだろうか。周囲の仲間の中で自己調整が可能になっていく姿のように思う。

幼稚園として幼児の集団における文化としての声、音・音楽の存在を考え、Y幼稚園としての独自性を引き出すことができた。

表現活動の太鼓を用いた『音』の具現化の出発から、幼児へ表現活動の基礎・基本を指導する短期間の過程は、和太鼓の教材化に関して、始めに和太鼓ありきではなく、幼児・児童からの想いや発想を十分引き出す期間であった。

生活が西洋化されて進んできた現在、Y幼稚園の幼児が草履をはいていることに注目し、彼らには太鼓を演奏する時は、体がフラフラしないでしっかりと立って静止できるであろうとの予感があった。足で体をしっかりと支えることができるからこそ、腕を自由自在に動かして、思いっきり太鼓を打つことができる。太鼓を打つ幼児の姿勢は最初から素直な、自然な形で、見た目がとても良かった。

終わりに

幼児期の音楽という単位で考えると、フリーハンドでいいのではないだろうか。Y幼稚園での実践は、地域の太鼓チームの練習に比べてたわいないと批判はあるかもしれない。しかし、おおらかでたわいない音楽演奏を通して、幼い人も一緒に仲間として対等な関係や仲間と調和良く合わせるという、共同で音楽を作りあう経験は、音楽を楽しむ根源的な姿であると考えられる。和太鼓の練習を通して、音楽が意識の動作から無意識の動作へと導かれていく過程は、幼児が納得した経験の積み重ねの成果である。

幼稚園の先生が感じた日々の子どもの変化には、

- ① 太鼓は失敗感がなく、練習をイヤがる子がいらない。
- ② 幼児なりに感じる時間の合間には、太鼓を置いてある部屋へ行って打っている。保育室に居る子ども達は伝わってくる音を「太鼓や」と受け入れている。
- ③ 年長児がしっかり打てるので、年少児が真似をしてそれらしく打つ。年長児につられて年少児が上手に揃ってきた。

が挙げられた。

そして、保育者だけで指導する観点として以下の確認があった。

- ① 太鼓を打つ時にはこの位でいい、という気持ちではなく、自らがしっかりと打つことを習慣にする。
- ② しっかり打った後の心地良さを体感できることが、幼児の心地好さを引き出すことになる。
- ③ 子どもの手の動きから、音楽の打てるところ、苦手なところ、自信のないところ、を見つけることが大切。
- ⑤ 幼稚園では3歳児から始めても、4歳児、5歳児と長くて3年間の経験である。幼稚園で3年間に何を伝えるのか、ということの確認が大切。
- ⑥ 練習（太鼓の稽古）をした実感は、そのつどに子どもが手ごたえとして掴むことで、次への参加意欲が進む。故に、誉めるヶ所を見逃さないようにする。

Y 幼稚園の視点は、太鼓を遊び体験として取り組み、一人ひとりの幼児がどのようにその子らしく豊かになるか、ということであった。幼稚園としては教育環境と教師の取り組みについて、指導の問題点や教師の役割などの共通理解を深め、検討を重ねた。幼児が太鼓の活動を通して何をどのように学び、幼児の内部に何が生じるだろうか、という検討の結果、筆者へ誘いの声がかかった。現在は里佳先生が必要に応じて参加し、幼稚園が主体的に取り組んでいる。演奏依頼も入り、“あそび教室”の和太鼓チームは張り切っている。

謝 意

本稿は、学校法人みどり学園 ゆたか幼稚園の岡村 豊 園長からのお誘いで始まった幼児対象の和太鼓指導をまとめたものである。2002年5月時点で、幼稚園の保育者は全員が初体験であった。保育者自身が練習の必要性を感じ、和太鼓の講習会へ参加するなど指導する立場としての準備に励んだ。草深里佳さんは指導する幼児と同じ年頃の2児の母親であり、子どもへの指導経験は初めてであったが、幼児の心理を掴んだ的確な受け答えをしてくれた。大勢の皆さんのご協力に感謝します。

註

- 1) 川崎智子「乳幼児の音楽・リズム感の発達に関する調査研究 — 保育者からみた個々の幼児の音楽的能力適性 —」三重大学教育学部研究紀要第37巻（教育科学）1986年
- 2) 川崎智子「音楽における幼児の内的活動に関する研究Ⅰ — 歌唱活動を通して —」三重大学教育学部研究紀要第32巻（教育科学）1981年
- 3) 「幼児におけるシンボリックランゲージからのリズム認識に関する研究」三重大学教育学部研究紀要第53巻（教育科学）2002年
- 4) Irene Deliege and John Sloboda 「MUSICAL BEGINNINGS」OXFORD UNIVERSITY PRESS 2000
- 5) 中西智子「幼児の歌の習得過程に関する分析研究Ⅰ — 手遊びについて —」三重大学教育学部研究紀要第42巻（教育科学）1991年
- 6) 中西智子「幼児の歌の習得過程に関する分析研究Ⅱ — リズム運動について —」三重大学教育学部研究紀要第43巻（教育科学）1992年
- 7) Patricia Shehan Campbell 「Songs in Their Heads — Music and Its Meaning in Children's Lives —」OXFORD UNIVERSITY PRESS 1998